

あびこの文化

発行人 大野 美崎
我孫子市 高野山
250-23
04(7182)
0861

あけましておめでとーございます

会長 美崎 大野

平素は当会の活動に格別のご協力をいただき
ありがとうございます。

会員の皆様、一昨年から続くコロナ禍の中での新年
をどのように迎えられましたでしょうか？

一年を振り返って

昨年も新型コロナに振り回された一年でした。

新型コロナウィルスの感染拡大は、年始前後の第3
波から8月の第5波へとピークの感染者数が増加した
一方で、ワクチン接種が進んだこともあってか、第5波
での死亡者数、致死率に改善がみられました。10月
以降、国内の新規感染者数は落ち着きをみせ、このま
ま終息へ向かう期待と、海外での感染の再拡大傾向、
新たな変異オミクロン株で第6波の懸念が入り混じる
年末でした。

日本国内では、海外に比べ、社会的距離（ソーシャル
ディスタンス）の確保やマスク着用などの「新しい生活様
式」が定着したように感じます。

新型コロナウィルスの感染拡大によって1年延期され
た最大のイベント東京2020オリンピック・パラリンピ
ックは、感染状況の終息が見通せない状況での開催に
世論が割れましたが、選手や関係者に大規模クラスター
などを発生させることなくやり遂げたことは評価
できるのではないのでしょうか。日本選手の活躍もメダル
の獲得数の増加など特筆できることでした。

ところでオリンピックと我孫子市についてあまり大
きな話題になりませんでした。スロベニア女子柔道代
表が、令和3年7月14日に羽田空港に到着し、同日
夜、事前キャンプ地の我孫子市に到着しました。これ
はオリンピックのスロベニア代表の事前キャンプについて、

令和3年5月24日に我孫子市とスロベニアオリンピック
委員会スポーツ連盟との間で、覚書を締結したこと
により。我孫子市は「柔道の父」と呼ばれる嘉納治
五郎が別荘を構えた柔道にゆかりある地であること
から、オリンピック出場権を獲得した柔道とテコンドー
選手の事前キャンプ地として白羽の矢が立ちました。



覚書の締結に
より、選手が
優秀な成績を
残せるようサ
ポートするこ
とや、大会終
了後もスポー
ツや文化交流
を継続し、相
互の交友関係
をさらに深め
ていくことを
確認しました。

（治五郎像の前に立つ駐日スロベニア共和国大使）



締結式に出席したスロベニアのアンナ・ポラック・ペト
リッチ駐日大使は「選手たちはセミファイナルに残るこ
とが目標。特に柔道は決勝進出に期待したい」と挨拶
しました。その後、ペトリッチ大使らは、嘉納治五郎別
荘跡や練習場所となる市民体育館武道場の視察を行

いました。（左上写真、左からオルガゴーチ、スパーリング
パートナーのアニヤ・スタンガール氏、選手のマルーシヤ・ス
ンガー氏、写真はいずれも我孫子市秘書広報課提供）

海外に目を転じると、米国ではバイデン氏が第46
代大統領に就任し、前政権の政策を転換しています。
国内でも、岸田新政権の発足とその直後の衆議院議
員総選挙が行われ、東日本大震災から10年、熊本地
震から5年となる一年でした。

また海外での日本人選手の活躍がありました。日本
人初の「満票」でMVPに選ばれた大谷翔平選手や、ゴ
ルフで日本人初のマスターズ制覇を成し遂げた松山英
樹選手が世界中から注目を集めました。女子では大
坂なおみ選手が全豪オープン2021女子シングルスで
2年ぶり2度目の優勝を飾り、23歳にして早くも四
大会で4個目のタイトルを獲得したことになります。

当会としては、4月に当会創立40周年の記
念誌「我孫子の文化四十歩み」を発行しました。

この記念誌では特集として前年完成した「嘉納治五郎
先生之像」の建立までの経緯を詳細に掲載しました。

銅像の台座には寄附を賜った皆様の方のお名前を刻
み、お礼の形としました。建立後、この銅像を見るた
めに別荘跡を訪れる方が増えたとの嬉しい情報もあ
ります。今後、観光スポットとしての期待も膨らんで
きます。また近くの第一小学校の生徒さん達が定期
的に銅像の掃除をしてきています。治五郎師範のこ
子孫が第一小に通学していたこともあり、ゆかりの小
学校の生徒さんたちの教育面、情操面でもお役に立っ
ているのも大変喜ばしいことです。

11月には千葉県教育功労者の表彰がありました。
市内には多くの市民活動団体があり、当会よりも歴
史・実績で優れた団体もあるなかで当会が表彰を受
けたことに面はゆい思いもありますが、当会の先輩方
が永年積み上げた実績が評価されたことを改めて感
じます。（次ページ、11月1日表彰式の集合写真、2列目
右から二人目、当会の村上智雅子副会長）

令和3年度教育功労者表彰式



令和3年度 千葉県教育功労者表彰式 R.3.11.1

昨年の総会、文化講演会も我孫子市が「まん延防止等重点措置」を実施する区域に追加指定されたことで、一堂に会して行うことは止め、総会については会報を送付することで実施しました。「史跡文学散歩」も残念ながら実施できずに経過しました。その中でも「放談くらぶ」はマスク着用を始めたとしてコロナ対策を十分に施しての開催でしたが、毎回、多くの方に参加頂きました。「短歌の会」プロジェクトは休会することなく2か月毎に開催しました。

今年に向けて

今年も新型コロナウイルス感染舎数の推移に注意しながらの会の運営になりますが、皆が笑顔で集まれるような年になることを願っています。

今年度の事業計画のうち「地元の歴史の掘り起こしと郷土の文化の維持・創生」のひとつとして特に「我孫子と平将門」について皆様とともに、一段と理解を深めたいと考えています。皆様のご協力とご支援をお願いします。

市民のチカラまつりイベント 当会主催講演会のお知らせ

「各地の将門伝説・伝承を探る」

—将門の本拠地はどこだ?—

『将門記』には、平将門が939(天慶二年)に新皇即位した後、坂東諸国の国司を任命し、「王城を下総国の亭南に計画した」ことが記されています。

具体的な所在地については石井郷(いわいごう)が多くの研究者から支持されてきました。

しかし将門の居所は数か所あったといわれており、その本拠地を豊田の地、守谷の地とする説、さらに手賀沼の南岸との説もあります。また我孫子や柏、取手、野田には将門に関する多くの伝説・伝承が残されており、その地域の方はこの地域に将門に関する伝説が濃厚に残っていることは重要なことであって、そのことを居所、本拠地に関係づけて主張する根拠としています。

今回、我孫子の文化を守る会ではそれぞれの地域で平将門を特に研究、調査されている方から、「地元の伝説・伝承をご披露頂き、わが地域が如何に平将門と関係があるか」を主張し、耳して頂き、将門についての理解を深めたいと思ひから下記の通り講演会を企画いたしました。

講演会の概要

日時 令和4年2月11日(金) 13時半～17時
場所 あびこ市民プラザホール

我孫子駅北口より北(徒歩約5分)

内容

第一部 基調講演『将門記』辛島の道について

講師 市立市川考古博物館 山路直充氏

第二部 講演・報告「地元に残る将門伝説・伝承」

講師 坂東市、取手市、柏市、我孫子市、

守谷市より

参加費 無料 申し込み不要(先着100名)

「ファースト・侍！ 平将門さま」 平将門講演会の開催奮闘裏話 〜将門プロジェクトに関わって〜

芦崎 敬己

一 プロジェクトの発端

二〇二二年一〇月九日(土)午後湖北地区公民館(コホミン)で、「ファースト・侍！平将門さま」と題する講演会が開催されました。

私は、我孫子の文化を守る会の会員ですが、この講演会の運営には、会員ではなく、一個人として参画してきました。開催の準備に、市民活動として一定の盛り上がりがありましたので、開催迄の奮闘裏話をお話

平将門、知ってますか。えっと歴史家？ 将門が初めのサムライ？
かつてこの地で活躍した平将門を通して我孫子について考えよう

米国で人気のサムライの武者・甲冑研究家
「ファースト・侍！ 平将門さま」とは

Hulu / Masaka dogAbiko

我孫子市民 図書館に 蔵書あり

講 師: カール・フライデー (PhD.)
米スタンフォード大(博士号)、東京大学、筑波大学に留学
米国ジョージア州立大学名誉教授、明・埼玉大学教授(歴史学)
著書: 『The First Samurai: Taira Masakado』、武士、甲冑研究など多数

日 時: 10月9日(土) 14:00 ~ 16:00 (開場 13:30)

場 所: コホミンホール(湖北公民館(湖北地区)) 我孫子市中央第3ビル Tel: 047-728-4433

参加費: 無料 資料代: 500円 (冊子「将門」1冊付) ※希望者のみ

お問い合わせ: t.frieder@com.kasagae.jp
実行委員会 Tel: 080-5029-6844 (7時台)

我孫子カルチャー&トーク
将門プロジェクト 共同企画

市民のチカラまつり 2021 企画部門講演会

ご予約は不要です。ご来場の際は、新型コロナウイルス感染症対策に留意し、入場者の検温、手洗いの励み、連絡カードの記載、高換気率の制御をお願いします。ご協力のうえ、ご協力ください。

海津さんは、我孫子カルチャー&トーク(略称ACT「アクト」という文化団体をご自身が主宰し、予てより平将門を調べている際に、偶々アメリカの大学教授が「ファーストサムライ平将門」と題する著作を出されていることを発見し、同団体の三〇周年の記念事業として、先生に連絡を取り講演の内諾を受け、講演会の開催を構想したとのことでした。

一方、市民活動に造詣の深い佐藤修さんを始めとする「我孫子・柏まちづくり編集会議」が地域の活性化、元気になるまちづくりの為に高校生も含めて一般市民ボランティアに事業案の提案等呼び掛ける動きが二〇二〇年の暮れ頃からありました。

この呼びかけに講演会を始め、平将門に関する勉強会、湖北地区での平将門関連史跡のガイドツアー、ねぶたの台船を製作し明かりを点けて手賀沼湖上に飾りだす等のアイデアが溢れるように出ました。

こうした動きにより平将門をテーマにしてまちの活性化に繋げようと、将門プロジェクト準備会が立ち上がりました。

準備会には、当会の元副会長で顧問の越岡禮子さんと、当会の幹事 戸田七支さんが参画しており、平将門に関する基礎的な知識や情報をメンバーに提供していました。

一方、ACTは、設立三〇周年記念事業としてカール・フライデー先生を講師に、市民のチカラまつり2021で講演会を開催する準備と手続きを進めました。

私は、こうした企画案がある程度進展した状況の途中で参画しました。四月七日でした。既に市民のチカラまつりに講演会開催で参加することがベースになっていた。

ひょう

並行して、湖北の日秀地区近隣に残る平将門関連の史跡を歩いて回る『平将門ツアー』の『ブレッサー』も戸田さんと越岡さんがガイドとなり試行されました。特に戸田さんは、平将門の居館と王城が我孫子市日秀・中里地区にあったとの説を唱え、この地域に残る伝説などから論考しての説が、プロジェクトの元気になるまちづくりに共鳴した点がありました。

しかし、平将門の関連事業が動き出す中、講演会をどのように開催するのか、運営の具体策が仲々決まらない状態でした。

二 実行委員長になる

プロジェクト準備会で、講演会が迫ってくる中で具体的な意見を表明した私が実行委員長に推薦されました。私は、現役時代イベントの開催準備や運営、新規事業の立ち上げ等を行ってきた経験があり、現役時代に戻った様な新鮮な気持ちになっていました。

しかし、片や成年後見人として一〇件の事業を担当する仕事をしており、決して時間に余裕があつたわけではなく、実行委員長の就任を初め強く固辞しましたが、地域・我孫子の活性化に繋がるならと承諾しました。七月七日のことです。

初めに講演会開催の企画書原案を作成し、開催目的を明確にしました。何を目指して開催するかを真剣に討議しました。同時に準備会を「ACT・将門プロジェクト共同企画」として実行委員会組織に衣替えし、平将門講演会の開催準備と運営をする事になりました。

七月から八月中旬の間は、平将門に関して私自身の下調べを行いました。公開講座に参加したり、我孫子市と柏市の平将門の関連史跡を歩き直したり、七月二十八日に戸田さんと神田明神の将門公展を見学して来ました。更に、YouTubeにアップされている平将門に関する動画類は殆んど複数回で閲覧しました。

NHK大河ドラマで平将門を題材の「風と雲と虹と」(一九七六年)の総集編(前編・後編)もあり、加藤剛さんの若い時の姿を垣間見ました。余談ですが、実は私、四〇年になる劇団俳優座後援会の会員で、生前加藤剛さんとは何度かツーショットの写真を撮ったことがあり、記憶が蘇りました。

更に、私が我孫子市寿に居を構えた理由は、家を建てて寿に下見に来た時に、建設会社の営業員が近くの道を指して「この道は昔、平将門が馬に乗って通った道ですよ。歴史があるところですよ。」と教えてくれたので、決めたのでした。こんにち、平将門講演会の開催

を準備することの因縁が、俄かに繋がったと感じた瞬間でした。

三 次から次の苦勞の連続

八月中旬になりカール・フライデー先生からの講演受託の確たる返事がなく、開催に不安な日々が続いていました。しかし、漸く一七日になって講演受託のメールの返信が海津さんに来て安心したのも束の間、先生は「自分が「戦国時代の専門家ではなく、(日本の)古代と中世前期の研究者」と断ってきたのです。このことを聞いた実行委員会は、大騒ぎになりました。確かに戦いや甲冑に関する著作があり、平将門を専門に研究しているのではないのです。

講演する先生と参加者の間に、平将門に対する気持ちのギャップが見えてきました。参加者は平将門を知りたいと思つて来場し、会場で講師が専門外ですと万が一言つたら、それだけで騙され、裏切られたような講演会になる危険性がありました。

しかし、平将門をファーストサムライとして銘打った著作を出しているの、先生に賭けようという雰囲気になりました。正に薄氷を踏む様な気持ちでしたが、名誉教授なのだから大丈夫だろうと信じました。そもそも先生は、アメリカに居たり、ハワイの別荘に居たり、日本に来てコロナ感染の二週間待機期間があったりで、先生との連絡が思う様に取れなかったのです。

一方、実行委員会では、講演会の内容と構成について、詰めの議論を始めました。

この企画の目的を「かつて平将門が闊歩した地である我孫子の理解を多くの市民に広め、さらに深めて、これからの元気な地元のまちづくりに繋げる」としたのです。更に、地元には将門に対する熱い思いを抱く方に敬意を表してタイトルを『ファースト・侍！平将門さま』としました。

また、講演後のあり方として、参加者からの質問に答える単純な質疑応答ではなく、参加者が自分なりの意見を言える機会を作り、フライデー先生と共に地域の郷土史研究家や将門ファン、一般市民が意見交換を通して実のある交流になるように、その時間を

「セッションタイム」と称して、一方通行ではない形を作り上げようと思いました。

ポスター原案は、海津さんが既に作成し、私も背景色等でアレンジを施しました。多くの方にご参加願いたいとA3判ポスター一〇〇枚、A4判のチラシ二〇〇枚の印刷をインターネット印刷通販に発注しました。開催二〇日前の九月二〇日のことです。

ポスター・チラシは、中二日で出来映えもよく出来上がり届きました。我孫子市や近隣の公共施設・図書館・博物館、大学等に郵送し、掲示を依頼しました。プロジェクトメンバーは、自宅近くで掲出しました。

丁度、この頃、先月から体調を悪くしていた九〇歳になる義母が心不全で入院し、コロナで見舞いにも行けず病院の相談室に掛合つたり、町田市の自宅や介護事業所と話し合つたり、全く気が抜けない時期でした。

次には、当日の配布資料の原案作成や、会場演壇の吊看板の作成に取掛りました。フライデー先生とチームにより事前の打合せ会議を九月一五日に行いましたが、先生からの講演関係資料が届いたのは、一〇月三日でした。大筋の内容は作成済みでしたが、頁建ての関係で、どの資料を入れるかが未定でした。

A3判用紙を縦四つ折り(十字折り)にハンディな形状にして、平将門に関する基礎的な知識を織り交ぜ、日秀地区の将門神社と首曲がり地蔵の写真を掲載し、更に先生のスライド資料を七点使つて、当日配布の小冊子の印刷原稿を作成しました。

この原稿を印刷業者にメールで送信しようとしていた時に、突然パソコンがダウンし、夜中までかかつて作成した原稿が全て消滅してしまいました。今晩中に送信しないと印刷出来ないと思うと、体は震え額からは汗が噴き出しました。一〇月五日未明のことです。原稿の部材(パーツ)は残してあったので、文字入力をして飾り付け、日が昇る頃までには間に合いました。ぐったり疲れました。

印刷業者に送信して、開催前日の八日の昼頃に、無事宅配便で我が家に届きました。注文通りの仕上が

りで、完璧な印刷でした。

しかし、資料代を頂く小冊子でしたが、内容をプロジェクトに掛けて協議する時間がなく独断で作成していたので、分かり易さや情報の必要度等の点でかなり冒険でした。もつと時間を掛けたかったところです。

講演会に伴う企画の全体が見えてきたら、ポスター・チラシ・小冊子等の印刷経費、看板作成費等が膨大になってきました。当初から資料印刷費を捻出するため、入場料を参加者から徴収する案もありましたが、入場料は徴収しないルールで市民のチカラまつりに参加していますので、資料代として実費程度を頂くことにしました。それも、我孫子市市制五〇周年を記念して創作された湖北の和菓子司「福一」の『将門餅』を付けて、普段二個入りセットですが無理をお願いして一個販売で資料代としました。

実は、福一のご店主もプロジェクトのメンバーで、一年以上前から海津さんと共に平将門に因んだ和菓子作りに挑戦していて、二〇二二年二月に完成したとのことでした。

和菓子付きで参考資料(小冊子)を実費販売すること、事業に係る収支も大きな赤字を生じる心配もなくなり、よし、これでいこうとなりました。

四 いよいよ開催

開催日前々日に司会役の鈴木さんが会場を下見して、当日午前中からの使用可能を示唆され、市民活動支援課の協力もあり急遽午前中から使えることになりました。

当日は、少し雲が出ましたが晴れ間の見える天候に恵まれ、メンバーは昼前に会場に集合しました。

当会の役員四名から特別に個人的協力を頂き運営実務に携わって頂きました。

受付や看板等の会場設営、音響チェック、スライド映写のセッティングを自ら行い、準備が整いカール・フライデー先生を迎える車で到着する頃には、会場入り口には思った以上に来場者が押し寄せていました。

無料リーフレットを来場者全員に配布し、小冊子に将門餅一個を付け販売したところ、発注した将門餅

八〇個は売り切れてしまい、却ってご迷惑を掛けることになりました。

フライデー先生は、スライド映写を用いて四〇分ほど講演されました。

引き続くセッションタイムでは、多くの方から質問票が出され、全てに答え切れませんでした。佐藤さんがフライデー先生と質問者や発言者を絶妙に繋いでいく司会技術の巧みに感心させられました。そして予定時間を少し超過して終了しました。



当初三〇人も集まればよいとの悲観論もありましたが、最終的に来場者数は、スタッフ一三人を除き、一四人が参加しました。事前の問合せでは、我孫子市内だけではなく、遠く埼玉県や千葉市から参加希望があり、アンケート等によると三〇歳代から九〇歳代の幅広い方の参加がありました。

質問・感想などのアンケート票からは、「将門公については、少々本を読んだ程度でしか知らなかったもので、こういう場があればまた参加したいと思います。」「市内・三〇歳代」「すごく楽しめた。知らないことが多



かったので、我孫子の史跡を探検したいです。」「(市外・八〇歳代)「湖北近在に住んで早や五〇年、将門伝説について学んだことはありませんでした。フライデー先生の講義、大変興味深くお聞き致しました。」「(市内・八〇歳代)「将門の敵は、将門の妻子を殺したが、将門は敵将の妻を助け、本陣に返した。」「(市内・九〇歳代)などと質問が一九件、感想・自由意見は五〇件が寄せられました

今回の講演会を通して、実行委員会内の信頼協力関係が構築され、多くの地元関係者の方のご理解とご協力を頂き、当初の目的が達成出来て、とても大きな成果に繋がったと確信しました。

カール・フライデー先生をはじめ、ご協力下さった多くの皆様に改めて心からお礼を申し上げます。



茨城県 取手市・守谷市・坂東市の 将門伝説史蹟探訪

佐々木 侑

我が将門公御最厚仲間の主張する共通項は「我孫子の日秀地区一帯に、将門公の主要な本拠地があった」とする。その根拠は、『遙か彼方都のある西の方角から、死霊となった将門公と主従数名が天馬に乗り、雲間から手賀沼を越え日秀の台地に帰還した。この地に将門公に所縁のある村人が祠を祀り現在まで手厚く崇拝した』との言伝えであり、今の「日秀将門神社」を中心とした地域が本拠地の一部であるとする。この説は今のところ少数説ではあるが、主要な本拠地

だからこそ「帰還」との言葉が信憑性を持ち、各地の本拠地伝説には「帰還」という言葉は一切使われてない事からも日秀地区一帯を本拠地の一つであるとする。不本意にも無残な死に方をした将門公だからこそ、望郷の願いは強く、「本拠地」に残した一族郎党に逢いたいとの願望の「帰還」であつたと信じ、下総相馬地区において我孫子市と同じく将門公を熱く敬う、取手市・守谷市・坂東市の将門史蹟検証に赴いた調査報告である。

1、取手市・相馬惣代八幡宮

平将門公の生誕地についても諸説あつてはつきりとしたことは分らないが、母の出身地である相馬郡で育つたと言われ「相馬小次郎」と称した。当時は母方の実家で子供を産み育てることが習慣であり、そのため将門公も母の実家「犬養家」で生誕したという説が有力である。父は平良将。母は県犬養春枝の女(あがたいぬかいはるえのむすめ)。茨城県取手市には、その当時に母方の実家、犬養家があつたと言ひ伝えられている。



八幡宮境内は、将門に関する案内板もなく、ひっそりとした森に囲まれた質素な神社で、将門がこの地で生まれ育ち、幼少期を過したと思われる。相馬惣代八幡宮は県犬養家の崇敬を受けた神社と言われている。

2、取手市・龍禅寺三仏堂

平将門公と大変関わりの深いお寺で、多くの伝承が残されている。

境内にある「三仏堂」は国指定重要文化財となっており、将門公がここで生まれたという伝説もある。

「米井山(べいせいざん)無量寿龍禅寺」と号し、龍禅寺に残る寺調査明治二十八年によると、三仏堂は延長



二年(924)に伝誉大阿闍梨が開き創建した。龍禪寺は天慶二年(939)の創建であり、三仏堂が龍禪寺より先に開かれたと伝わっている。三仏堂のある「米ノ井」という地名も、将門公が武運長久祈願のため三仏堂を詣でたところ、堂前の井戸から米が噴き出し、これを吉祥と将門公は大いに喜んだという故事が由来だと言われている。三仏堂の名は堂内に収められた釈迦、弥陀、弥勒の三体の仏様に由来する。承平七年(937)に将門公が三仏堂を修営し、仁王門・鐘楼を建てたとも伝えられている。

「三仏堂で平将門が生まれたという伝説」

「将門公の母が身こもつて、三仏堂に籠った。二十一日間、扉を開けてはならないと父の良将に伝えたが二十日目に良将は中を覗いてしまった。すると中に大蛇がいて、赤子をへろへろと舐めていた。大蛇は赤い龍となつて、千葉原柏市にある布施弁天に飛んで行った。二十一日間舐めると全身が鉄になったが、一日足りなかつたのでこめかみだけ生身になり、将門公の弱点がこめかみとなつてしまった。そのためこめかみを藤原秀郷によって矢で撃ち抜かれ戦死した。」

3. 守谷市・大雄山海禪寺

なぞ多き伝説が残る将門公ゆかりの古刹である。守谷市高野に建つ大雄山海禪寺は承平元年(931)平将門公創建と伝えられ、位牌などゆかりの品が残されている。

寛文四年(1664)に四代守谷藩主でのちの大老・堀田正俊が寺の由来などを記して寄贈した『海禪寺縁起』(守谷市指定文化財)によると、将門公は延長八年(930)に京都から相馬御厨の下司として帰った後、父の供養のため紀州の高野山を模して海禪寺を建立し、寺が建つ地を高野(こうや)と名付けたという。

本堂に安置されている将門公の位牌には「平親王将門公 當山開基 得怡廉三大禪定門 尊像」と記され、手厚く供養されたが、「寺に残された将門公にまつわる品々はほとんどが江戸時代につくられたもの。確かな古文書がないので伝説の域を出ませんが、だからこそミステリアスで面白い」と椿文嶺住職は語っているとのことである。訪問日にお目にかかった椿副住職からも将門公の由来を熱く伝えられた。

また、本堂には将門公を祖とする下総相馬氏と近世旗本相馬氏の位牌が安置され、墓所には相馬要胤と相馬信胤の墓もあり、いずれも将門公の紋と信じられた「繋ぎ馬」の家紋が刻印されている。

本堂に向かって左側に横一列で並ぶ八基の石塔は、将門公と家来7人「七騎武者」の供養塔で、平良兼と平貞盛両軍に待ち伏せされ身代わりになって死んだ7人の影武者伝説に基づく石塔である。

寺は将門公の胴塚だったとの説もあるが詳細は不明で、7人の家来は騎馬戦で乗る野生の馬を追って調教していたとされ、こうした将門公の軍事訓練が福島祭「相馬野馬追」の始まりといわれる。

*八基の石塔。向かって右が将門公の供養塔で、七騎の「七」は将門が信仰した妙見信仰の北斗七星に結びつくとも言われている。



4. 守谷市・守谷城址

守谷城は、平台山という丘の上に平将門公が建てたという伝説がある。周りは沼で、古城沼と呼ばれていた。かつては瀬(かわうそ)が生息していたと伝わる沼である。

守谷は、平将門公の王城の地とされ、守谷城が相馬の御所と長い間伝えられていた。実際は相馬氏代々の居城であったと言われているが、一説に、公園がある辺りを将門公の城として「本守谷城址」と呼び、時代と共に規模が南に大きくなったので、守谷小学校がある辺りを「守谷城址」と呼んで区別したりするまでである。



5. 坂東市・国王神社(くおうじんじや)

この地が平将門公の終焉の地と云われている。ご祭神は平将門命。『神社分限帳』には、「平将門が討たれた所にその霊を祀った」と記述があり、天慶三年(940)2月14日、藤原秀郷・平貞盛連合軍との戦いの最中、流れ矢に当たって落命した将門公の「終焉の地」が、この境内であると伝えられている。



将門公の戦死後、母と共に奥州に逃れた三女如蔵尼(滝夜叉姫)が父戦死の地を尋ねて岩井に来て、庵を結んで父の霊を弔い、三十三回忌に当たる天禄三年(972)に森の中から霊木を見つけ、一刀三拝して父将門公の木像を彫り小祠に祀った。

木像は、「寄木造座像平将門木像」(茨城県重要文化財指定)。高さ二尺寸の衣冠束帯姿で、右手に笏を持つ。像の表情を見ると、目は吊り上り、口は八の字に結び、怒りの形相を表わし、武人の気迫がみなぎっていると言われている。ただし、如藏尼が彫刻したと伝わる木像も学術的には室町時代作と推定され、年代的にも大きな開きがある。

本殿は、江戸時代初期の天和三年(1583)に建立されたと伝えられる。常緑樹に囲まれた入母屋造りの拝殿、幣殿、本殿からなる社殿は、茅葺、流造の建物で、弊殿によって拝殿に接続している。(茨城県重要文化財指定)

＊将門公の復権の石碑(国王神社境内・将門史蹟記念碑)

桓武天皇の子孫平氏でありながら、兵を挙げ新皇を名乗ったことから「朝敵」と見做された将門公は、表立って敬うことを許されない存在であった。朝敵の認識が解かれたのは、時代が下った徳川幕府のときである。しかし明治新政府によって過去に朝敵であったことが再び問題視された。国王神社でも、信仰する氏子だけで祭事を行わなければならないようになった。

織田完之氏などの復権運動家により、将門公の評価が回復するのは昭和末期になつてからである。

6. 坂東市・島広山・石井(いわい)営所跡

営所跡は将門公が政治や軍事の拠点とした場所で、将門公や家臣たちの屋敷、食糧庫や馬つなぎ場があつた。



たところ。この営所は、旧岩井市の名前由来になつている。

岩井市街地から延命寺に向かう途中の台地を島広山と称し、将門公が拠点とした石井営所跡がある。明治期に建てられた石碑の表面には「島広山・石井営所跡」と刻まれており、右側の副碑には、将門公の事績と営所についての説明文が添えられている。

石井営所が『将門記』に記されたのは承平7年(932)当時のこと。将門公の雑役夫を務めていた丈部(はせつか)小春丸が平良兼の甘言につられてスパイとなり、詳しく営所内の建物配置などを良兼に知らせた。良兼は好機到来とばかり精兵八十余騎で石井営所に夜襲をかけるが、将門方の郎党の急信により大敗したと記されている。石井営所は、名実ともに将門公の政治、経済、軍事の拠点とされたが、天慶三年(940)将門公は藤原秀郷と平貞盛の連合軍と合戦に破れ、営所の建造物は焼き払われた。

7. 石井(いわい)の井戸

将門公が城建設の地を求めて島広山あたりを家来たちと馬でかけまわり、喉が乾いた将門公が湧き水でもないかとあちこち探していると、「水」とひとこと声がしてどこからともなく白髪の老人があらわれた。老人は、近くにあった大石を軽々と持ちあげそれを地面に打ち込むと、そこから清水がこんこんと湧き出てきた。将門公たちは、その水でやつとのどを潤すことができ老人に感謝したという。一連の成り行きを見て不思議に思つた将門公は、老翁に「貴方は一体何者なのか?」と訪ねた所、「久方の光の末の景うつる岩井を守る翁なりけり」と一首の歌を詠み姿を消してしまった。この老翁を祀る一言大明神



(一言神社)は、石井の井戸と共に住民に崇拝され続けたと言われる。

8. 一言神社

将門公が水に困っていたとき、一人の老翁の力で(一言願えば霊験あらたか)水が湧きだした井戸があり(石井の井戸)その老翁を祀った神社と言われる。

9. 坂東市・延命院

延命院は新義真言宗に属し神田山如意輪寺延命院。また篠越山延命院観音寺ともいう。

本尊は延命地藏菩薩。開基は京都東寺の僧宗助で、中興の祖は来世法師。

現存する観音堂は、閑宿城主牧野成春公の助力で宝永七年(1710)に建立され、堂内の聖観音立像は伝教大師の作と伝えられている。境内にある不動堂の裏に円墳があり、この塚を将門山、または神田山(からだやま)と称している。



将門公は、天慶三年(940)2月14日の合戦を迎えて石井の北山に最後の布陣をした。最初は風上に立つて優位な戦いであつたが、急に風向きが変わり正面から突風を受ける立場になり、敵の流矢を眉間に受けて倒れた。その首は藤原秀郷(俵藤太)によって京都

に送られ、晒し首にされた。

残された将門公の遺体をひそかに神田山の延命院境内に葬ったのが、この胴塚と伝えられる。この地は相馬御厨の神領であばかれることがなかった。

胴塚の西側には、昭和50年に東京都大手町の将門首塚から移された「南無阿弥陀仏」の石塔婆が建てられている。

＊胴塚の天然記念物：カヤノキ

胴塚を抱くように大きなカヤノキが立っている。幹回り4m以上、樹齢は1千年以上とされている。

非公式情報によると「将門公戦死の地」は「北山稻荷大明神」と呼ばれる場所。

住宅街の裏側に、一本のけもの道が伸び、その先に将門公が亡くなったとされる聖地がある。古い小さな祠の隣には「鎮魂 平将門公之碑」と刻まれた大きな石碑が建っていると言ふ。

所在は「茨城県坂東市辺田1402-1 北山稻荷大明神」。近いうちに訪問の予定である。

以上

金唐革紙から柳宗悦を想う（2回目）

大井 正義

（註）（）数字は参考文献、文末参照

金唐革紙の製作を再開した昭和三十年代です。日本本土は戦時中にアメリカ軍に爆撃されたので、終戦時は東京をはじめ、多くの都市は街の大半が、あるいは中心部のほぼ全域が廃墟となった時代でした。そのことのみではなく、終戦直後は今日からは想像できない、物資が極めて不足していた時代でした。昭和三十年代はこのような時代から素早く戦前以上に、奇跡の復興をした時代でした。そのことは一九六〇（昭和



三十五年）池田勇人首相が国民所得倍增計画を閣議決定したことであるように、各企業は製品の増産に奔走していた時代でした。

この時勢は戦前戦中の統制社会に順応して生きてきた人々が、戦後は解放された時代になったので欧米の先進技術を探りいれ、経済大国に邁進していた時代でした。その甲斐があり日本の国民総生産は一九六八（昭和四十二年）、西ドイツを抜いて世界第二位の経済大国を達成した時代でした。これは国民の勤勉性によるものですが、一方多くの国民は、文化あるいは文化財への関心は希薄な時代でした。

当社の王子工場も空襲を受けたので生産設備は廃虚となつてしまつたが、早くも終戦の翌年の一九四六（昭和二十一年）年十月には、一部の機械装置を復旧させたので、凄く復旧力であることがわかりました。その後金唐革紙の製作を再開した時は、最新式の機械も増設し、主力製品増産を行っていた時代でした。このような時勢のなかで、上司は利益のみを追求したのではなく、「日本の伝統文化」の保護を考慮していました。

これは戦前に金唐革紙の継承を大きな決断をして継承したが、戦時中は同紙を作る和紙を見ながら、この壁紙の製作ができなかった無念さを考えてのことであつたと想像します。私が上司をこのように考えたのは、他にも同様の事例をおこなつていたからです。

当社には京都工場があつたので、この工場を考えます。一八六九（明治二年）までは、京都は首都でしたが同年に明治天皇は東京に移住したので、首都は東京に遷都されました。このため京都府は京都の衰退を考慮し、京都市に製紙工場の建設を一八七三（明治六）年に計画しました。（建設理由は製紙業界を述べる製紙史等にも記載がなく、当社にも伝承されていませんが、私は当時の京都府が遂行した施策等からこのように考えます）。このことを知った日本の近代化を進めていた明治天皇から、十萬円の御下賜金（こかしきん）を賜り建設された工場でした。

この工場はドイツ人により建設されたので、工場名

はドイツ語で欄間等に見られる透かし彫りされた、横書きの立派な門扉で表示されました。しかし、表示には企業名はなく、ドイツ語で製紙工場「ピール・ファブリック」とのみ表示されていました。この表示方法は通常見られる正門の門柱に企業名を、漢字で縦書きした表示ではなく、企業名も表示されなかったもので、近代化を進めた当時の世相が想像できる貴重な門扉でした。

上司は一九五五（昭和三十）年にこの門扉の模造品を作り、建設時の門扉と交換し、本物の門扉を「紙の博物館」に寄贈しました。当社は残念なことに経営破綻をしたので消滅してしまいましたが、この門扉は同館で常設展示されています。

経済産業省が近代化産業遺産の調査を開始したのは、二〇〇七（平成十九）年でした。上司はこれより早い前述の時代に、京都工場の門扉を保存したのは、文化財の重要性を認識していたからです。

柳が「民芸の美を見出した大正時代は日本帰郷の時代であり、柳のこの思想は、美しいもので世を満さなければならぬ、という生産の場への関心を生んだ思想でした」（5）。この思想は日本の伝統文化を大切に

する思想でした。この思想で上司の戦前の金唐革紙の継承と戦後の再開、日本の近代化の曙を伝える門扉の保存を考え、柳の思想が連想できます。それ故、金唐革紙の保存に努めたこと、京都工場の門扉を保存したことを民芸論で考えるのも、大きな外れではないと考えます。

私はこのような体験をしていたので（私は金唐革紙を作つていませんでしたので、正確には見ていたと述べるべきかもしれませんが）、重複しますが私が我孫子に住み、柳が「工芸品＝民芸品の美しさ」を着想したのは、「我孫子でしたので奇遇であると思いました」。

それ故、「我孫子の文化四十歩の歩み」の『嘉納治五郎の銅像に想いを馳せて』を執筆したとき、私は嘉納治五郎にも親しみをもつていたので、嘉納が我孫子に学園開校構想を決めたことを柳の文を引用して、この

情景で決めたのでは、との想いで執筆しました。

バーナード・リーチの碑文が、我孫子ロータリークラブにより手賀沼公園に建立されているように、氏は我孫子に大きな貢献をしたことがわかります。リーチは白樺派について、「白樺派の影響によりイギリス人である私はまだ二十代の初め、セザンヌの古典主義とゴッホの燃えるようなロマン主義のとりこになった、生涯白樺派の影響をうけた」といっています。

本文を執筆するについて参考にした著書に、この言葉載せているリーチ著『東と西を超えて』があります。同書はリーチが晩年に執筆した著作ですが、同書を執筆するについて、柳から受け取った手紙の束を整理していると、その中に、「これからの人類の進歩は、まったく東洋と西洋の相互理解によると確信している」と述べた手紙があったことを載せているので、同書の題名は柳の手紙から命名したことがわかります。柳も生涯リーチの影響を受けたが、リーチも柳の影響を受けていたことがわかります(6)。

このような記述のなかで私が注目したのは、「私はまだ二十代の初め……」という記述でした。というのは、私は上司が前述のような熱い想いで金唐革紙の製作を再開したことは、当時の年代では考えなかったからです。これは今にして思えば、私の勉強不足によるものでした。

金唐革紙の製作を終了したのは前述の理由によるものでしたが、それ以上に大きな要因があったのは、当社はアート紙の製造企業としては中小規模でしたので、主製品の厳しい販売環境があったからでした。そのため企業としては、この壁紙の製作を終了したが、上司が実施した前述の事例を考えると、あの時代は私たちが歴史の彼方に置き忘れてきてしまった、何か大切な人が生存していた時代でした。

「我孫子の文化四十年の歩み」に『嘉納治五郎の銅像に想いを馳せて』を執筆したこと、つづいて会報にこの二編を執筆しましたが、この三編はここに登場した人々たちを改めて思い出させてくれた、私の個人的な人生の思い出として描かせて頂きました。私に「我孫子の文

化四十年の歩み」への投稿をすすめて下さった、美崎会長に熱意に感謝いたします。

参考文献

1. 出川直樹『民芸』新潮社発行 1988年
 2. 久米康生『金唐革紙と擬革紙』紙の博物館発行 2003年
 3. 本皮革技術協会 皮革ハンドブック編集委員会『皮革ハンドブック』樹芸書房発行 2008年
 4. 吉野興『風船爆弾』朝日新聞社発行 2000年
 5. 熊倉功夫『民芸の発見』角川書店発行 昭和五十二年
 6. バーナード・リーチ、福田陸太郎訳『東と西を超えて』日本経済新聞社発行 昭和五十七年(間違ひ個所の訂正)会報182号文中
- 「宗悦はこのような活動が認められて文化勲章を授与され……」に訂正します。

放談くらぶ 講演報告

「タマゲル(魂消える)はなし」

「魂は躰からどんな時に抜け出るの？」を
受講して

牧田 宏恭(会員)

暮も押し迫る12月19日(日)頭書の演題で「放談くらぶ」が開催された。コロナ禍は下火に感じられてはいるが、次の「オミクロン株ウイルス」感染も心配される今日、受講者の人数は30名に絞られアビスタ会場にて行われた。



講師は「民俗学」研究で著名な萩原法子氏。氏には「オビシヤの謎を解く」と題しての昨年ご講演に続いて

一年振りの講話である。どんな「タマゲル」話が飛び出すのか興味津々に耳を傾ける。以下、その要約、感想を述べる(写真1)。

《要約》

①魂(たましい)とは人間の生命原理である。すなわち人間に宿る「心」「精神」「気力」。↓エネルギーその原理機能によつて、生きる日々が掌(つかさど)られる。たまタマ(魂)は丸い形、躰(カラ)タマから自由に出入りする。

出入りする躰部分は、目・口・鼻・耳などの「穴」、首・手首・足首などの「関節」である。

②タマは躰から抜け出る(ヌケル)ヌケガラ、無くなる(ナキガラ)亡き骸。

③タマはどんな時に抜け出るのか？ 防ぐ方法は？ 出てしまったタマは呼び戻せるか？

「病氣やケガ」は躰からの一時的離脱で生じ、永遠の離脱は「死」を意味する。「タマゲル」魂消える・無くなる・亡くなる」

④タマの出入りは、古書、話、和歌などに散見。

「くしやみとともに魂は抜け出る」——赤子は魂があの世からこの世に送り込まれることにより誕生。赤子がくしやみをする時魂が飛び出し、死ぬ。「鼻結びの麻糸」

——赤子の魂は不安定、生後7日間(くしやみ)を恐れる習俗として、くしやみの度に魂が抜け出ないよう麻糸を「玉結び」タマヌスビ(タマユイ)する。平安時代以前から大正まで。写真は明治26年の例(写真2:萩原氏資料)。



その他、「山塊記:安徳天皇降誕の条・治承二二年(1178)中山忠親の日記」に同意の記述や「徒然草」「伊勢物語」にもタマヌスビに繋がる記述や歌が見られ

るようだ。また、タマムスビに代えてくしやみの折、呪文(じゅもん)を唱える方法(沖繩)。奄美大島の「チガヤ」、そして時代はずっと昔に遡り「埴輪に見る首飾り・腕輪・足輪」はお洒落ではなく「タマイ、タマムスビ」の意味であった。これはイヤリング、ネックレス、ブレスレットなどのルーツ(写真3 萩原氏資料)。

「くしやみ」は凶兆 世界的にも英語圏の「God bless you」など各地に呪文が存在する。

そして、出て行ったタマの呼び戻し(タマヨビ、タマヨバイ)は？



名前を呼ぶ行為——名前はその人の霊

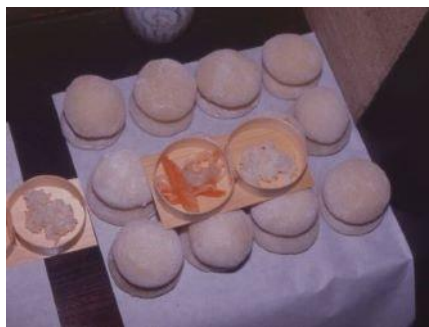
魂(タマ)に付けられたもので、名前を知ることとは、その魂を自由にできるということを意味し、古くは女性の名前を尋ねることは、求婚の意味があった(万葉集・巻頭歌の例)。「ヨバイ」は魂を呼び寄せる、すなわち異性の名を呼ぶことを表している。伊豆、八丈島の「ヨバイト」、能登地方の「ヨバイクチ」という表現もこのことに関連する。

⑤正月の「アラタマ」——

正月は新しい年の魂から始まり、新しい年の魂をいただく事を表す。

「年の神様」田の神様——全てのものがエネルギーを得、年齢を重ね(数え歳)、新しい年の豊かな実りを祈る行事で、地方により種々行われる「トシダマ・松戸、吉川」「オミダマサマ・宮城」「ヤマドッサン・淡路島」「カサ」神の姿「トシド

ン・鹿兒島」「トシモチ」「ニダマ・秋田」「ナマゲ(大晦日



に)などは皆同様である(写真4 萩原氏資料)。

⑥「産育儀礼」に見る魂の安定——誕生から七歳までの行事

昔は七歳まで無事に育つまでは、「神の子」とされ、七歳になると、人別帳に名前が記載されるほど育てるのが難しいとされていたので、七歳までは種々行事が行われていた。「お七夜」「お食い初め」「一升餅、ブツツイ餅」「初誕生日」「カゴモチ」そして七歳になると「ヒモトキ祝」「子返しの儀礼」・茂原などが行われる。関連して十一代将軍・徳川家斉の子沢山の裏話が紹介された。

(感想)「魂」タマシイそして「タマの出入り」に纏わる多彩なお話に本当に「タマゲター……」。

私は、昔から「タマゲル」という表現は、「本当にビックリした」「かなり驚いた」の意味で、日常当たり前のように無意識に使われていると思っており、言葉として「タマゲター」「オツタマゲター」などがその一例である程度の認識であつて、この言葉の「語源」意味するところ「など考えてもみなかった。本日は大変面白く、興味深い」「タマゲル(魂消る)はなし」を伺い、言葉の持つ意味を意識し直す機会となった。萩原先生に改めてお礼を申し上げる次第です。

あびこだより 99号

『ギリシタン版の発見アーネスト・サトウの功績』——龍之介の悪戯と尾瀬沼の保存——

原田 幸四郎(天王台社協)

明治初期、日本で活躍したアーネスト・E・サトウは、外交官として有名ですが、それだけでは、彼の正当な評価とはなりません。彼は第一級の日本研究者「Japanologist」でもあり、多くの研究論文を遺しております。最も価値ある論文は、明治二十一年ロンドンで出版した「日本耶蘇会刊行書志」です。それまで、我が国で金属活字を使う活版印刷は、明治初期長崎で本

木昌三が最初と考えられていました。ところがそれより約二七十年前の一五九〇年、秀吉の天下統一が成就した年から二十年の間に、ポルトガルから持ち込まれた活版印刷機を駆使した書籍が刊行されていたことを発表したのです。後にギリシタン版といわれているこの種の書籍は、イエズス会宣教師が基督教の布教や自身の日本語習得のために刊行したものでした。当時の話し言葉で書かれていたこともあり、言語学者を始め、書籍コレクターの「ギリシタン版探しが勃発します。現在、三十二冊が確認されています。徳川時代の徹底した基督教弾圧で、廃棄尽くされ、稀覯書の最たる書籍となっていました。

そうした中、大正七年、芥川龍之介は「奉教人の死」を発表しますが、その文末に「自分の所有する一五九六年、慶長二年の耶蘇教出版【れげんだ・おうれあ】に書かれた物語を参考にした」と書いてありました。当然、学者やコレクターの芥川詣が始まりました。只、言語学者新村出だけは、一五九六年は慶長元年で、二年はおかしいと芥川の悪戯と見破っていたそうです。

サトウは、生涯独身でしたが、日本人妻がおりました。次男の武田久吉は、植物学者であり、登山家であった父サトウと同じく登山家で、東京電力が企画していた尾瀬沼のダム計画の反対運動に尽力し、現在の尾瀬沼が守られています。

(プロジェクト報告) 百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌(恋の歌)

(その11)
由良の門(と)を 渡る舟人 かちをたえ
ゆくへも知らぬ 恋の道かな

(46)

【現代語訳】

由良川の河口の流れが速い瀬戸を漕ぎ渡る船頭が、櫂をなくして行く先も分からずに漂っていく。そんな

ようにこれからどうなるのか行く末が分からない私の恋の道行きた。

【語句】

【由良の門(と)】由良は丹後国(現在の京都府宮津市)を流れる由良川の河口。「門(と)」は、海峡や瀬戸、水流の寄せ引く口の意味で、河口で川と海が出会う潮目で、潮の流れが激しい場所。

【舟人】船頭さんのこと。【かぢをたえ】「かぢ」は、櫓(ろ)や櫂(かい)のように舟を操る道具のことで、船の方向を変える現在の「舵(かじ)」とは異なる。「たえ」は下二段活用動詞「絶ゆ」の連用形で、「なくなる」という意味。ここまでが序詞になる。【行くへも知らぬ】上の句の流される舟の情景と、下の恋の道に迷う部分との両方に意味がまたがる言葉。「行く末が分からない」という意味になる。

【恋の道かな】「道は、これからの恋のなりゆきを意味する。「門(と)」や「渡る」「舟人」「かぢ」「行くへ」「道」はすべて縁語。

【作者】

曾禰好忠(そねのよしただ。生没年不詳、10世紀後半の人)花山天皇時代の歌人で、丹後掾(たんごのじょう)だったため、「曾丹(そたん)」とか「曾丹後(そたんご)」と呼ばれていた。斬新な歌で知られ、歌の才能を高く評価されていたが、性格が偏屈で奇行が多く、社会的には不遇だった。

この歌の作者はとも偏屈な性格だったようだ。たとえば、寛和元(985)年の円融院(えんゆういん)の御幸の歌会に招かれなかったため、粗末な格好で乗り込み、「才能は決してそこいらの方々に比べ劣っていない自分のような名歌人が招かれぬはずがない」と言つてまわり、襟首をつかまれて追い出された、というエピソードがある。世間では物笑いの種で出世もしなかったようだが、奇矯なところはあるとはいえ、歌の実力は確かだった。

この歌の舞台の「由良の門」の場所には、実は2つの説がある。ひとつは前に述べた宮津市の由良川で、こちら

が現在ではほぼ定説化している。もうひとつは紀伊国(現在の和歌山県日高郡由良町)にある由良の御崎(みさき)で、新古今集の時代には有名な歌枕だった。京都府の宮津市にある由良川は、宮津線丹後由良駅で下車すると見ることが出来る。宮津市は天橋立で有名。古都であるので神社なども多く、楽しめる観光都市である。

和歌山県の由良は「良」紀勢本線・紀伊由良駅で下車。白い岬が印象的な海辺の街で、白崎海岸県立自然公園があり、鍾乳洞探検やスキューバダイビングなどが楽しめる。

関連狂歌

由良のとを 渡る舟人菓子を食べ

お茶のかはりに塩水をのむ

由良の戸を 渡る三庄大夫より

からき目を見る 安寿不便や

注:山椒大夫伝説。不便は不憫に同じ

丹後由良は三庄大夫の居住地とされる

裏の戸をたく待ち人門たがへ

ゆくへも知らぬ 恋の道かな

世の中を渡る買手の金は絶へ

行方も知らぬ 恋の道かな

買手:遊女を買う

(その12)

風をいたみ 岩うつ浪の おのれのみ

くだけて物を 思ふころかな

(48)

【現代語訳】

風が激しくて、岩に打ち当たる波が(岩はびくともしないのに)自分だけ砕け散るように、(相手は平気なのに)私だけが心も砕けんばかりに物事を思い悩んでいるこの頃だなあ。

【語句】

【風をいたみ】「いたし」は「はなはだしい」という意味の形容詞。「:(を)」+形容詞の語幹+「み」で「:(が)くなの」というように原因・理由を表す語法となり、ここでは「風が激しいので」という意味になる。【岩うつ波の】

「岩に打ち当たる波の」という意味で、ここまでが序詞。【おのれのみ】「のみ」は限定の副助詞で、「自分だけ」という意味。【砕けて】「くだけ」は下二段活用の自動詞「くだく」の連用形で、微動だにしない岩にぶつかって砕ける波と、振り向いてくれない女性に対して思いを砕く自分、という意味を重ねている。【ものを思ふころかな】「物事を思い悩んでいるこの頃だなあ」という意味になる。

【作者】

源重之(みなものとしげゆき。生年不詳、1003年頃・清和天皇の曾孫(ひまご)で三十六歌仙のひとつ。冷泉天皇の時代に活躍し、天皇の東宮時代に帯刀先生(たちきはきのせんじょう)、即位後は右近将監から相模権守(さがみのごんのかみ)に出世した。

源重之は国司として筑前や肥後など地方を廻り、最後に陸奥(今の東北地方)で没した。

波と岩に託しておのれの激情を語る鮮烈なイメージの一首である。普通砕けてしまうのは、女性の心と思いがちだが、ここで千々に思い悩むのは男性の方。「砕けてものを思ふころかな」は、平安時代の歌によく使われる恋の悩みの表現。ある種ありきたり、とも言えるが、そこに序詞で嵐の海の情景を詠み込んだことで、陳腐な恋の言葉が劇的な名歌に姿を変えてしまった。

さかまく波に寄せて激しい情念を歌い込んだ印象の強い一首といえる。

関連狂歌

胸はいたみ袖はいけどとなりけり

またあふ事も涙もろはく

水をいたみ米うつきねのをのれのみ

くだけて物を思ふころかな

(水入りの米をつけば砕けやすと聞いて)

弓をいため今射る矢先三十の

三間堂を通す武士かな

(川柳)

おのれのみくだけと思ふ焼継屋

注:焼継屋は割れた焼物を継ぎ合わせるのが商売

第三十二回短歌の会(最終採択の一首)

十一月二十三日実施

墨あとも清しき文字の意味あじわい
会場巡る秋の日や佳し

村上 智雅子

過ぎこしは戦後の日々さえ懐かしく
「頑張ったね」と亡き母に言う

納見 美恵子

恋しくて秘めて尋ねし君のまち
甲府市城下町今はなき街

佐々木 侑

ナナカマド藪深き木々を紅く染め
朝靄の中秋深まりぬ

飯高 美和子

線路脇桃や真紅の薔薇の花
さくらトラムで友と会う昼

芦崎 敬己

たつぷりの水遣りのみにて生き延びて
赤シクラメンピンと立ち咲く

美崎 大洋

とおくとはどこであろうかコスモスの
色がにじんで暮れなずむ里

伊奈野 道子

五地蔵の背のあじさい頂きます
墓前に飾り塔婆の鳴れり

大島 光子

七度を生まれかはりて剣岳に
登るねがへどかなふや否や

三谷 和夫

当会の行事予定

□「放談くらぶ」

日時 2月19日(土) 14時～16時

会場 並木北近隣センター2F会議室

講師 原田幸四郎氏

演題 「ギリスタン版の発見・アーネスト・サトウの

功績」

(10ページ「あびこ」より99号参照ください)

◎参加費、会員無料、非会員三〇〇円

申し込みTEL七二八五〇六七五 佐々木まで

□プロジェクト「短歌の会」

第三十三回短歌の会

日時 1月25日(火) 13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

江戸時代の道標を保存

我孫子市寿一の水戸街道と成田街道の分岐点(追分)に残る江戸時代の道標を保存しようと地元住民が整備工事に着手した。同所には複数の道標があり、1816(文化十三年)の不動道標には正面に「成田道」と書かれ、東の成田・佐倉、西の松戸・千住、北の土浦・水戸などへの距離が記されている。この他にも記載内容不明の石碑がいくつかある。

同所に生えていたマツとサクラの木が最近伐採されたのを機に放置状態を解消する機運が高まり、有志が保存会を立ち上げた。地元の自治会や商店会も協力、工事費用に充てる寄附を募り、約100万円が集まった。工事は年内に完成予定という。

「我孫子市文化財保存活用地域計画」の

説明会に参加して

11月26日(金)に開催された標記出前講座(教育委員会講師)に参加したので報告する。

令和2年12月18日に開催された文化庁文化審議会文化財分科会において、我孫子市を含む7市町の文化財保存活用地域計画を認定することが文化庁

長官に答申され、この答申に基づき我孫子市文化財保存活用地域計画が文化庁長官より認定された。認定が開始された昨年度から現在までの認定件数は23件、我孫子市は銚子市と並び千葉県内の自治体として初の認定となった。

これに先立ち我孫子市では令和元年8月に「我孫子市文化財保存活用地域計画協議会」を立ち上げ、令和2年3月、令和2年6月、令和3年3月、令和3年9月と5回、協議会を開催している。協議会への傍聴参加も人数が限られることから「出前講座」として説明会が開催されたもの。

(参加しての感想と提案)説明会では我孫子市民が文化財の存在そのものに関心が少なく、認識がないとの発言があったが、今まで文化財に特化しての具体的な市のPRや積極的な働きかけがあったとは思えない。五団体についてはもともと歴史的な文化財を中心として関心を持つ市民が集まっているが、一般の市民に文化財について今後いかにPRするかが、課題である。すぐに実行できる案として以下に挙げる。

(1)定期的な「文化財見学ツアー」を市と五団体を含め文化財に関心のある市民活動団体とが共同で実施する。五団体は講師を派遣する。

(2)市内の小学校、中学校で特別に「文化財教育」を実施する。講師に市の担当者や五団体の会員が派遣することもある。(美崎)

編集後記 今年の干支は壬寅(ジニイン、みずのえとら)、十干は「壬(みずのえ)」、巡ってくる十二支が「寅」。「壬は「妊」に通じ、陽氣を下に妊(はら)む」、「寅は「蟻(ミミズ)に通じ、春の草木が生ずる」という意味がある。「壬寅」は厳しい冬を越えて、芽吹き、新しい成長の礎となるイメージだ▲ところで、今年はまだの「寅年」ではなく丁度「五黄の寅」にあたる。これは九星(一白水星から始まり、二黒土星・三碧木星・・・と続く)と称する中国の民間信仰と十二支を組み合わせたもので、九と十二の最小公倍数が36となるため36年毎に巡ってくるという訳だ▲「五黄」は、星は土星・方角は中央ということで、運氣が高いとされている。「五黄の寅」に生まれた人は、強運と強いパワーの持ち主。特に女性は、社会で活躍する人が多いとされる。(美崎)